# 2021 年度　横浜商科大学地域貢献協働事業　研究成果の概要

**研 究 課 題 名**　　**2021 年度の成果報告と本学「まちなかキャンパス」の取り組み**
**研 究 代 表 者**　　**教授　佐々　徹**

## １．2021 年度の実施報告

### （１）2021 年度に申請した事業

報告者が 2021 年に申請した地域貢献協働事業は、「授業一体型プロジェクト」が３件、「個人又は共同プロジェクト」が１件である。

**①授業一体型プロジェクト**

このうち、「授業一体型プロジェクト」については、以下の３件を申請した。

・野毛まちなかキャンパス「横浜・野毛の商いと文化」
・中華街まちなかキャンパス「横浜中華街の世界」
・鶴見コンシェルジュ養成講座

**②個人又は共同プロジェクト**

「個人又は共同プロジェクト」については、以下の１件を申請した。

・本学と大口通商店街協同組合との包括連携協定（「商店街活性化と地域振興における連携に関する協定」）に基づく協働プロジェクト
　本学学生の発案によって始まった「ハロウィンだよ！ おおぐちチビッ子フェスティバル」の企画・運営

### （２）2021 年度の実施状況

上記４件の申請事業のうち、「野毛まちなかキャンパス」、「中華街まちなかキャンパス」、「鶴見コンシェルジュ養成講座」の３事業については、2021 年度は実施することができた（2020 年度は、コロナ禍のためいずれも中止）。ただし、新型コロナウイルス感染症は 2021 年度も終息せず、やむなく当初の計画を変更し、講義回数を縮減したうえ、オンラインで実施した。

「個人又は共同プロジェクト」の「ハロウィンだよ！ おおぐちチビッ子フェスティバル」については、協働相手である大口通商店街協同組合との協議により、2020 年度に続いて 21 年度も中止とすることになった。

### （３）野毛まちなかキャンパス

上記事業のうち「野毛まちなかキャンパス」は、2021 年 11 月８日から 12 月 20 日にかけて、講義回数を全７回に縮減して実施した（通常は全 14 回）。また、通常は野毛のまちなかの施設を利用して対面で実施しているが、今年度については全回をオンラインで実施した。

しかし、対面で実施の際は教室として利用している施設の都合などで学生の履修者を 20 名程度に制限しているが、オンラインでの実施のため履修者数の制限をしなかったことにより、学生は 71 名（対面で実施した 2019 年度は 24 名）が履修している。その内訳は、４年生が 21 名、３年生が 39 名、２年生が 11 名である。

一方、一般社会人の受講者は、延べ 79 名（１回あたり平均 11 名）であった。なお、対面で実施した 2019 年度は全 14 回で延べ 168 名、１回あたり平均 12 名であるので、１回あたり平均で見るとほぼ例年どおりの受講者数である。

2021 年度のプログラムは、次頁の表１のとおりである。

表１　2021 年度「野毛まちなかキャンパス」のプログラム

| 回 | 講義タイトル | 担当講師 |
|---|---|---|
| 第１回 | 明治時代の写真に見る横浜 | 横浜開港資料館館長<br>西川 武臣 |
| 第２回 | 野毛山不動尊・横浜成田山～歴史の流れとともに | 野毛山不動尊・横浜成田山　総務主監付渉外相談役<br>加藤 明彦 |
| 第３回 | 横浜市民ギャラリーコレクション（所蔵作品）の形成と現在 | 横浜市民ギャラリー学芸員<br>齋藤 里紗 |
| 第４回 | 野毛山動物園の歴史・現在 | 横浜市立野毛山動物園 園長<br>田村 理恵 |
| 第５回 | 野毛の町の演芸場 | 横浜にぎわい座事業担当<br>田谷 祐紀 |
| 第６回 | 横浜総鎮守伊勢山皇大神宮創建と創建１５０年 | 伊勢山皇大神宮 宮司<br>阿久津 裕司 |
| 第７回 | 横浜能楽堂探訪 ～約 150 年の歴史を持つ関東最古の能舞台～ | 横浜能楽堂プロデューサー<br>秦野 五花／大瀧 誠之 |

**（４）中華街まちなかキャンパス**

「中華街まちなかキャンパス」は、2021 年５月 10 日から６月 28 日にかけて、講義回数を全８回に縮減して実施した（通常は全 14 回）。また、通常は横浜中華街のまちなかの施設を利用して対面で実施しているが、今年度については全回をオンラインで実施した。

しかし、「野毛まちなかキャンパス」と同様に、対面で実施の際は教室として利用している施設の都合などで学生の履修者を 20 名程度に制限しているが、オンラインでの実施のため履修者数の制限をしなかったことにより、学生は 60 名（対面で実施した 2019 年度は 19 名）が履修している。その内訳は、４年生が 29 名、３年生が 17 名、２年生が 14 名である。

一方、一般社会人の受講者は、延べ 106 名（１回あたり平均 13 名）であった。なお、対面で実施した 2019 年度は全 14 回で延べ 254 名、１回あたり平均 18 名であるので、１回あたり平均で見ても社会人の受講者数は減少した。

2021 年度のプログラムは、次頁の表２のとおりである。

**（５）鶴見コンシェルジュ養成講座**

「鶴見コンシェルジュ養成講座」は、2021 年 11 月 11 日から 2022 年１月 13 日にかけて、講義回数を全７回に縮減して実施した（通常は全 12 回）。また、通常は鶴見駅周辺の施設を利用して対面で実施しているが、今年度については全回をオンラインで実施した。

学生は 15 名（対面で実施した 2019 年度は 20 名）が履修した。その内訳は、４年生が６名、３年生が１名、２年生が８名である。

一方、一般社会人の受講者は、延べ 136 名（１回あたり平均 19 名）であった。なお、対面で実施した 2019 年度は全 12 回で延べ 442 名、１回あたり平均 37 名であるので、社会人の受講者数は大きく減少するという結果になった。

2021 年度のプログラムは、次頁の表３のとおりである。

**表２　2021 年度「中華街まちなかキャンパス」のプログラム**

| 回 | 講義タイトル | 担当講師 |
|---|---|---|
| 第１回 | 横浜開港と中華街 | 横浜ユーラシア文化館 副館長<br>伊藤 泉美 |
| 第２回 | 横浜中華街の現状とこれから | 横浜中華街発展会協同組合 理事長<br>江戸清 代表取締役会長<br>高橋 伸昌 |
| 第３回 | プロフェッショナルが語る―中華街ゴミ問題最前線 | 武松事業デザイン工房<br>シニアマネージャー<br>武松 昭男 |
| 第４回 | 横浜大空襲と中華街 | 一石屋酒店<br>蔡 金仙<br>横浜華僑婦女会 会員<br>楊 鳳蓮 |
| 第５回 | 中国舞踊による伝統文化紹介 | 中国舞踊家<br>区 愛玲 |
| 第６回 | 横浜華僑社会の風習 | 塾「寺子屋」主宰<br>元･横浜山手中華学校教諭<br>符 順和 |
| 第７回 | 横浜中華街の料理の変遷 | 横浜華僑総会 顧問<br>菜香グループ 代表<br>曽 徳深 |
| 第８回 | 中国の伝統療法―自然治癒力を引き出す気功体験 | 気功伝道師<br>任 鎮東 |

**表３　2021 年度「鶴見コンシェルジュ養成講座」のプログラム**

| 回 | 講義タイトル | 担当講師 |
|---|---|---|
| 第１回 | タクシー会社から見た鶴見、マーケットの展望と課題 | 東宝タクシー株式会社<br>代表取締役社長<br>大野 慶太 |
| 第２回 | 2021 年　開創 700 年を迎えた　大本山總持寺 | 鶴見歴史の会<br>齋藤 美枝 |
| 第３回 | 天王院にみる民間習俗 | 天王院 住職<br>生方 常明 |
| 第４回 | 鶴見区の鉄道と鶴見区の街づくりに深く関わった鶴見臨港鉄道 | 鶴見歴史の会<br>間口 健一 |
| 第５回 | 古文書に見る鶴見川～暴れ川流域の、水と人との関わり～ | 鶴見歴史の会<br>酒井 晴雄 |
| 第６回 | 自分の地元として～タンポポはどこでも咲く、根づく～ | 鶴見区商店街連合会 副会長<br>喫茶タンゴマスター<br>髙橋 英昭 |
| 第７回 | 進め！生麦盛り上げ隊～地元に密着した手作りのまちおこし～ | ハッピーバーバーマツノ<br>生麦盛り上げ隊<br>松野 良明 |

## ２．まちなかキャンパスの概要

### （１）開講の経緯

次に、本学独自の取り組みである「まちなかキャンパス」の事業について、開講の経緯や目的等をはじめ、事業の概要を紹介したい。

現在、本学の「まちなかキャンパス」は、横浜市中区の野毛地区と横浜中華街で開講しており、前者は野毛地区振興事業協同組合、野毛地区街づくり会、横浜にぎわい座と、後者は横浜中華街「街づくり」団体連合協議会との協働によって実施している。なお、鶴見区制 90 周年記念事業として本学が提案し、鶴見区役所、鶴見区文化協会、鶴見歴史の会、鶴見みどころガイドの会の協力を得て開講した「鶴見コンシェルジュ養成講座」も、「まちなかキャンパス」のノウハウを活用し、同様の運営方法で実施している。

この「まちなかキャンパス」は、野毛地区の活性化を目指して本学と野毛のまちの方々とが協議を重ねる中で開講した「野毛まちなかキャンパス」（2007 年開講）から始まっている。その開講の経緯は、次のとおりである。

①2004 年、本学学生が企画した「商店街イベントプランコンテスト」（※）の実施を野毛商店街（横浜市中区）が引き受けてくださったことを契機に、本学と野毛のまちとの交流と連携が始まる。

②野毛地区の活性化に関して野毛のまちの方々と協議を重ねる中で、同地区の地域振興を担う「野毛地区街づくり会」から、野毛地区への本学サテライトキャンパス開設の要請を受ける。しかし、サテライトキャンパスの開設には施設面で多くの課題があったため、その代替案として本学より「まちなかキャンパス」の開講を提案。2007 年に「野毛まちなかキャンパス」が開講した。

③野毛地区でスタートした「まちなかキャンパス」が非常に好評であったため、2009 年、横浜中華街「街づくり」団体連合協議会の協力を得て、本学が提供する横浜開港 150 周年記念事業として「中華街まちなかキャンパス」を開講する。

**※商店街イベントプランコンテスト**

横浜市内の商店街に協力していただき、その商店街を元気にするイベントのアイデアを様々な大学の学生から広く募り、審査員（商店街関係者、商工会議所および横浜市経済局関係者、商店街問題に取り組む専門家）による審査の結果、最も優れたアイデアをその商店街で実施するというコンテスト。本学の学生有志が企画し、野毛商店街の協力を得て 2004 年に開催した。横浜市内や東京都内の 10 大学から 12 チームの参加があった。

優勝したのは横浜国大のチームであったが、国大チームのアイデアを実現化するプロセスも、本学学生たちが中心となって進めた。

### （２）開講の目的

「まちなかキャンパス」は、若い世代の関心の喚起と新たなファンづくりを企図した「地域振興」と、「地域と大学との協働による新しい学びの場の創造」の２つを目的として開講されている。

**①地域振興**

若い人びと（学生）に対して、地域振興や地域商業活性化への関心を喚起する。それによって、次の時代を担う学生たちの地域に対する理解を深め、若い世代の力をまちづくりに取り込むための基盤を構築する。

さらには、地域商業を担う人びとと学生たちとの相互交流を進めて、その地域の新たなファンをつくり、地域商業の活性化やコミュニティの再生につなげていく。

**②地域と大学との協働による新しい学びの場の創造**

地域のまちなかにキャンパス（教室）を置くことにより、学生たちがその地域独特の文化や雰囲気を実感しながら学習できるという、大学内ではできない講義を開発・提供し、大学における講義バラエティの充実を推進する。

また、実施する講義を一般社会人にも開放し、学生たちと社会人とが相互に刺激を受けながら学習していくという場を地域の中に創り、その地域のＰＲや情報発信などにも活用する。

### （３）基本コンセプト

「まちなかキャンパス」は、次の４つを基本的なコンセプトとする。
①大学ではなく地域の中の施設を活用して講義を行う。
②地域で活動している人たちを講師とする。
③その地域をテーマとして講義を行う。
④その地域に関心を持つ社会人と大学生とがともに学び、交流する場にする。

### （４）まちなかキャンパスの特色

本学が実施している「まちなかキャンパス」の特色は、以下の５点に集約できる。
①大学の正規授業科目であり、単位（２単位）を修得できる（学生向けイントロダクション授業を含め、１コマ 100 分で全 14 回の構成となっている）。
②本学の場合は、観光マネジメント学科「学科専門科目」の授業科目となっている。
③横浜市内大学間単位互換制度の対象科目であり、本学の学生のみでなく、横浜市内にキャンパスを持つ 12 大学（本学を含む）の学生が授業として履修することができる。
④受講者は、学生と社会人とがほぼ１対１（同人数）となっており、世代の異なる人びとが１つの教室で講義を受け、相互に交流できる場となっている。
⑤座学のみではなく、全講義のうちの約半分が見学や体験、ワークショップとなっている。

## ３．開講の成果

### （１）想定内の成果

「野毛まちなかキャンパス」については 15 年間、「中華街まちなかキャンパス」については 13 年間続いており（ただし、2020 年度はいずれも中止）、本学独自の取り組みとして定着しているが、継続して実施してきたことによる成果としては次のようなことが挙げられよう。
①開港以降の横浜において最もシンボリックな２つのまちで「まちなかキャンパス」を開講することにより、本学学生をはじめとする市内大学に通う学生たちや市民が、都市としての横浜の成り立ちやアイデンティティへの理解を深める機会を提供している（毎年ではないが、市内他大学の学生も履修している）。
②まちなかキャンパスの受講がきっかけでまちのファンとなり、受講後もまちに通ったり、まちのイベントの運営に携わるようになった学生や社会人も現れている。
③日本（横浜）に来たからこそ得られる体験ができると、留学生からの評価が高い。特に「中華街まちなかキャンパス」については、中国人留学生にとって、日本に定着した華僑や華人と出会う貴重な経験ができる場となっている。
④学生のみでなく受講した社会人からも高い評価を得ており、10 年以上継続しているが、常にほぼ満席の状態である（教室として使用するまちなかの施設のキャパシティが限られており、これ以上のＰＲはできないことが問題点である）。

しかし、そもそも「まちなかキャンパス」は、これらを目的もしくは目標として開講されており、これら４つの成果については、当初の期待どおりの結果が得られたということを示すものである。

### （２）想定外の成果

上述のとおり、（１）に挙げた成果は期待どおりの結果が得られたことを示すものであり、いわば「想定内の成果」であるが、長期間にわたって継続して開講してきた中で、報告者が想定していなかった成果も現れている。たとえば、以下のようなことである。

①野毛地区や中華街周辺の小・中学校に転勤してきた教員、地域と連携した総合学習に携わる教員に、地域の歴史や現状を学ぶ場として活用されている。また、ある大手料飲販売企業は、新任（転勤者も含む）の営業担当者が担当エリアのことを知るための研修プログラムとして、本学の「まちなかキャンパス」を利用している。
②他の場所から転入してきた新住民や、新規出店した若い店舗経営者などに、自分のまちについて知識を深める場として活用されている。
③地元の自治会・町内会、商店街協同組合の理事や役員等に、地域の歴史の学び直しや、今後のまちの課題を考えるヒントを得る場として活用されている。
④大学という中立的な機関が企画・実施しているため、まちの中で意見や立場の異なる人びとが、その違いを超えて運営に協力したり受講者として参加できることが、まちにとってのメリットであるという評価をいただいている。
⑤講師として招いた方々が、本学の「まちなかキャンパス」を通して相互につながり、地域での活動や研究のネットワークが広がっている。すなわち、「まちなかキャンパス」が、その地域について研究する専門家たちの知的交流の場にもなっている。

以　　上